

冊

図書館だより



読書週間



10月27日から11月3日にかけて、「秋の読書週間」が始まっています。図書委員会では、例年この時期に「全校生の皆さんにもっともっと本に親しんでもらいたい」という思いから、さまざまな形で積極的に本の紹介をしました。そんな読書週間たった中！今号から数回に分けて、先生方の推薦図書を紹介します。今年はコースごとに掲載していきます。最初はST・Sコースの先生方からの推薦図書です。あなたも知ってる本がありますか？

滑川 孝則

『10代の憲法な毎日』

伊藤真著 岩波書店

校則と個人の自由、10代の結婚、生徒会や部活動でのトラブル等、高校生活でおこる様々な出来事を憲法にてらして高校生たちが考察しています。憲法を生活にいかす方法を具体的に学べる一冊です。是非一読を。



石川 圭

『まんがでわかるドラッカーのリーダーシップ論』

藤屋伸二監 宝島社

みなさんは『もしドラ』（『もし高校野球の女子マネージャーがドラッカーの「マネジメント」を読んだら』）を読んだことはありますか？あちらも名作なので是非お読み下さい。ドラッカーの原書は高校生には少し難しいので、今回はドラッカーの入門書としてこちらを推薦します。



杉山 和則

『ル・コルビュジエを見る』 越後島研一著 中央公論社

Q1. 突然ですが問題です。

- ①国立西洋美術館
- ②水戸芸術館
- ③JR常磐線日立駅舎

①～③を通して伺えるのは、どんなことでしょうか。

Q2. 本校の各校舎のうちコルビュジエ的な部分は、どこでしょう。本書を読んで考えてみましょう。また、街歩きのお供にもどうぞ。



本井 睦也

『スキマの植物図鑑』 塚谷裕一著 中央公論社

「コンクリートの裂け目やアスファルトの割れ目など、一見植物にとって住みにくそうな場所は、実は楽園である。」という著者のまがきに面白さを感じる。オオイヌノフグリやドクダミなど、都会の至るところで力強く生きている植物に焦点を当てたユニークな図鑑。



小林 美咲姫

『空は、今日も、青いか？』 石田衣良著 集英社

『池袋ウエストゲートパーク』でお馴染み、石田衣良のエッセイ集です。3ページほどで終わる短いエッセイが56編あります。そのなかでも、『「永遠の女」の正体』という文章があり、そこに、「女性にはたくさんの武器は必要ないと思う。誰にでも持ち歩くことを許されるのは、ひとつかふたつのちいさな輝きだけである」というような内容があります。もちろん、キャリアや容姿のことを言っているわけではありません。あなたの内面の話なのです。



泉田 泰斗

『まんがで読破 武士道』

新渡戸稲造著

イースト・プレス

「花は桜木、人は武士。」太平洋の架け橋として、日本を国際社会に紹介した新渡戸稲造が特に日本の倫理観を記した本。今回は読みやすい漫画版の紹介ですが、興味を持ったのなら書籍版も是非読んでみて欲しい。時代と供に失われた良き大和魂を思い出せるでしょう。特に修学旅行で海外に行く2年生にオススメです。



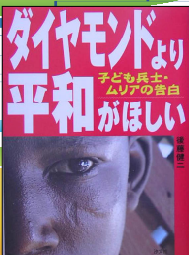
“読書の秋”の由来

その語源は中国にあるとのこと。唐の時代の文人韓愈（かんゆ）が、秋の夜は過ごしやすいので灯りをつけて読書をするのに一番適した季節であるという意味の詩を残しているそうです。

綿引 隆

『県庁おもてなし課』 有川浩著 角川書店

一昨年映画化された『県庁おもてなし課』を紹介します。東京オリンピック招致プレゼンで「おもてなし」の言葉が流行りましたが、この本に既に「おもてなしマインド」【p.378】が登場していました。登場人物の「働く姿」は、社会に出るみなさんの指針になるかも。著者の有川さんがこの作品に至るまでの経緯も興味深いです。



柴田 一生

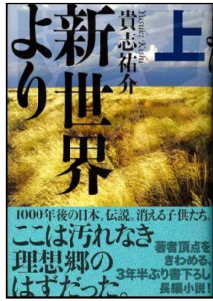
『ダイヤモンドより平和がほしい～子ども兵士・ムリアの告白』 後藤健二著 汐文社

イスラム国によって無念の死を遂げたフォト・ジャーナリスト後藤健二さん。シエラレオネの少年兵士の取材中に垣間見える後藤さんの優しいまなざし。ああ、貴重な人を失ったんだなと思わされます。彼の死から1年。もう記憶から薄れていませんか。命は二度絶えます。一度目は肉体が減じた時、二度目は忘れられた時です。

五十井 俊

『新世界より』 貴志祐介著 講談社

これはそう遠くはない未来の日本の話。全ての人類は「念動力」という超能力に目覚め、神として崇められていた。争いや貧富の差のない理想郷で暮らす人々、しかし主人公の早季はこの美しすぎる世界に違和感を覚えていた。そんなある日、理想郷の外の世界に踏み込んでしまった早季は神の力「念動力」の起源に触れてしまう。

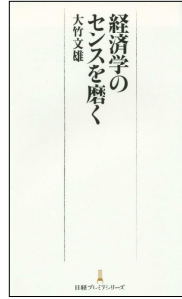


永井 一哉

『経済学のセンスを磨く』 大竹文雄著 日本経済新聞出版社

推薦図書は、生徒の無自覚な欲求を可視化させる一冊を選びたい。本書は、経済学を学ぶことで得られる「視点」を教えてくれる。人間の行動と現代社会の現象を構造的に読み解くための一助になるだろう。

もし本書を読んで何かやってみたいと感じたときは、藤野英人著『投資家がお金よりも大切にしていること』も一読されたい。

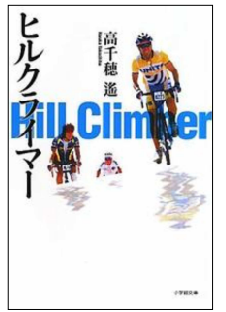


松木 久恒

『ヒルクライマー』

高千穂遙著 小学館

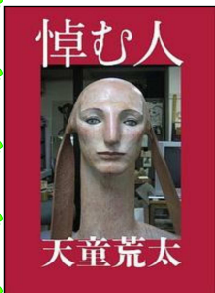
「登った先には、たしかに何かがある。それが何かを具体的に説明するのは無理だけど、登ってみれば、わかる。絶対にわかってもらえる。」この小説の中で登場人物が言った言葉です。自分もその何かを知りたくて、今年ヒルクライム大会にいくつも参加しました。



水本 光樹

『悼む人』 天童荒太著 新潮社

年を重ねるなかで、身近な人の「死」と向き合わなければならないことがあります。その人の「死を悼む」ということがどういうことか、考えるようになりました。昔から好きだった作家・天童荒太さんの作品で今の私の問題意識にぴったりの本でした。皆さんもこの本を読んで考えてみて下さい。



北川 正朗

『シベリア鉄道9400kmの旅』 宮脇俊三著 角川書店

日本からユーラシア大陸の奥地シベリアを通り、モスクワまで通じる鉄道ルートがある。日本の北海旅行よりもスケールの大きな旅で、まだ知らない土地の上を走る鉄道に乗るワクワク感が伝わる。シベリア鉄道は電気の力で走るけれども、暖房は石炭ストーブであることには理由があることなど、なるほどと思わせるところがある。



小熊 洋瑛

『楽しい気象観察図鑑』

武田康男著 草思社

日本で起こる竜巻、虹、蜃気楼などの現象や雲が生まれる瞬間、空に映る地球の影などの空に関する不思議が写真を見ながら楽しめる本です。わかりやすい解説もついているのでみんな楽しめると思います。

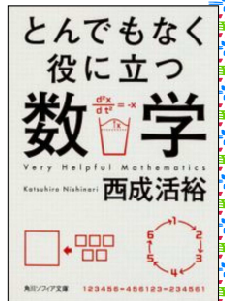


枝並 直樹

『とんでもなく役に立つ数学』

西成活裕著 角川書店

この本は著者が実際に高校生へ授業するのを再現したものです。将来数学が何の役に立つのと思っている方にお勧めです。現実社会で様々な場面で活躍している数学(例、渋滞を起こさないようにするには?など)を紹介しています。あくまでも参考書ではないですので気軽にぜひ。



野中 志保

『風姿花伝』

世阿弥著 講談社

日本の1年は梅に始まり菊が舞うまで、その時にしか咲かない花が咲き、散っていく。人の一生もまた同じ。10代、30代、50代、その時にしか咲かない花がある。17よりも27、27よりも37の方が素適な自分。

そう考えてがつがつしていた自分を変えてくれた大切な本です。



橋浦 義輝

『ザ・シェフ』

剣名舞著 日本文芸社

私からは、『ザ・シェフ』という漫画を紹介します。主人公の味沢匠は、天才的な料理の腕前を持つ料理人で、一回で百万円を超える法外な報酬を要求するクールで無口な人物です。

一見冷たい味沢ですが、依頼者に料理を通じて、さりげなく喜びを与えるところに心が温まります。是非読んでみて下さい。



斎藤 繁樹

『昭和天皇の戦後日本』

豊下楯彦著 岩波書店

国の形が変えられようとしている今、戦後日本の原点についての正確な認識が求められている。この点、本書は必読である。昭和天皇が支配層の中で誰よりも早く憲法改正の必要を認識して行動したこと、象徴となった後も様々なルートを通じて安保条約成立に尽力したことには驚かされる。対米従属の根はきわめて深い。



読書週間企画号 第一弾はいかがでしたか? 次回はAコースの先生方から推薦いただいた本をご紹介します! まあ!

COMING SOON